鹿児島大学リポジトリ
Kagoshima University Repository

Title	ハーバート・ブルーマーのシンボリック相互作用論の展開可能性
Author(s)	桑原, 司; 木原, 綾香
Citation	地域政策科学研究
Issue Date	2010-03-10
URL	http://hdl.handle.net/10232/8983
Rights	

*鹿児島大学リポジトリに登録されているコンテンツの著作権は，執筆者，出版社（学協会）などが有します。

The copyright of any material deposited in Kagoshima University Repository is retained by the author and the publisher (Academic Society)

*鹿児島大学リポジトリに登録されているコンテンツの利用については，著作権法に規定されている私的使用や引用などの範囲内で行ってください。

Materials deposited in Kagoshima University Repository must be used for personal use or quotation in accordance with copyright law.

*著作権法に規定されている私的使用や引用などの範囲を超える利用を行う場合には，著作権者の許諾を得てください。

Further use of a work may infringe copyright. If the material is required for any other purpose, you must seek and obtain permission from the copyright owner.

Kagoshima University Repository
http://ir.kagoshima-u.ac.jp

国立大学法人
鹿児島大学
KAGOSHIMA UNIVERSITY

研究ノート

ハーバート・ブルーマーの
シンボリック相互作用論の展開可能性

桑原　　司・木原　綾香

The potential of Blumer's Symbolic Interactionism

Tsukasa KUWABARA and Ayaka KIHARA

Abstract

Since 1960s, Symbolic Interactionism (SI) has come to the forefront as an alternative sociological and social psychological perspective not only in American Sociology, but also in Sociology of the world. In the beginning, many scholars in the field drew fundamental ideas mainly and approvingly from Blumer's works, especially, from his 'three premises.' However 1970s and 1980s have brought many criticisms of the perspective. Therefore, SI needed to reconsider and re-develop its perspective and method in response to the criticisms. Among those criticisms, two of those have become common and popular as the labels characterizing both Blumer's SI and SI as a whole. That is, on the one hand, SI has been seen as one of the subjectivist theories, and on the other hand, it has been called micro-sociology by its very nature. In sum, there are four challenges facing Blumer's SI: i) theorizing the influences of social structures on self-interaction; ii) theorizing the influences of self-interaction on social structures; iii) theorizing the social structure itself; and iv) consideration of the 'approach from "the positions of the actors"' in relationship to the macro-sociological version of SI's perspective. The main purpose of this paper is to examine Blumer's SI and to show the way in which his perspective (and method) should be reconsidered.

キーワード：シンボリック相互作用論，主観主義，ミクロ主義

第１節　シンボリック相互作用論の現況，ブルーマーの現況

「シンボリック相互作用論」(Symbolic Interactionism)とは，1960年代初頭にアメリカの社会学者ハーバート・ブルーマー(Blumer, H.G.)が提唱した，社会学的・社会心理学的パースペクティブの１つである。それは，人間間の「社会的相互作用」(social interaction)，就中，「シンボリックな相互作用」(symbolic interaction)を主たる研究対象とし，そうした現象を「行為者の観点」(standpoint of the actor)から明らかにしようとするものである(船津 1976; 桑原 2003: 11)。

シンボリック相互作用論は通常，その歴史的由来をG.H.ミードの業績に遡ることが出来る，と言われている。ミードは生前数多くの論文を執筆したが，ミードのシンボリック相互作用論

に対する影響の大部分は，彼の講義を聴講していた学生らによる講義録やメモの出版を通じて，あるいは当時ミードに学んだ学生の１人であったブルーマーによるミード解釈を通じて及ぼされたと言われている。ブルーマーは，主として1950年代と1960年代に数多くの論文を執筆し，シンボリック相互作用論の体系化を図った。以上のことから，シンボリック相互作用論は，ミード（の思想）が知的源流であり，ブルーマーによって確立されたという見方が定着した（Charon 1989: 26）。

ブルーマーのシンボリック相互作用論が，T. パーソンズを中心とする構造機能主義社会学や，G.A. ランドバーグを中心とする社会学的実証主義（操作主義）を批判し，それに代わる分析枠組や研究手法を発展させようとしたことは良く知られている。とりわけ，分析枠組に関しては，我が国の従来の研究においては，その「動的社会」観が高く評価されてきた。すなわち，社会というものを，「主体的人間」によって形成・再形成される「流動的な過程」ないしは「変動的」「生成発展的」なものと捉える，そうした社会観が高く評価されてきた（桑原 1999＝2007: 248‒249）。

当初「シンボリック相互作用論」と言えば，それは「ブルーマー」と同義という時代がしばらくの間続いた。とはいえその後，1970年代，1980年代になると，シンボリック相互作用論を担う新しいリーダーとして，N.デンジン，T.シブタニ，H.S.ベッカー，A.L.ストラウス，R.H.ターナー，S.ストライカー，G.ファインなどが登場し，このパースペクティブの新たな方向性が模索されるとともに，ブルーマーの理論化に対する種々の批判が展開されるに至った。1970年代にはさらに，E.ゴフマンが台頭し，「ドラマトゥルギー」（dramaturgy）と呼ばれる手法の重要性がますます増大した（Charon 1989: 26）。

アメリカ社会学界においては，この手法は通称「SI」と呼ばれ，SI にもとづいた幼児集団の観察など，社会心理学的な実証研究や小集団研究が一時期は盛んに行われた。ただ，質的研究や質的な社会調査をベースとする SI は，的確な分析結果をもとに成果を発表することが難しく，研究者にとっては発表論文数が少なくなりがちとなる。このことから，かならずしも研究者の評価にはつながらず，競争が厳しいアメリカ社会学界においては全般的に沈滞気味であり，研究例は減少傾向にあると言わざるをえないのもまた事実である（桑原・奥田 2008: 48）[1)]。

とはいえ上記の動向は，我が国の社会学界には必ずしも当てはまらない。特に注目に値するのは，日本社会学史学会の『社会学史研究』31号（2009年）と，東北社会学研究会の『社会学研究』82号（2007年）である。前者は「20世紀アメリカ社会学における『個人化する社会』」という特集のもと，「個人化論」という観点から，ミード，ゴフマン，J.アレクサンダーに焦点を当てているが，収録された論文はいずれも，上記の1970年代及び80年代の“シンボリック相互作用論に関する議論の掘り起こし”を，「意図せざる結果」として内包したものとなっている。また後者の特集は「シンボリック相互行為論〔作用論〕の刷新」を企図したものであり，収録された諸論文のどれもが，シンボリック相互作用論におけるブルーマーからの“離脱”あるいは“離陸”（すなわち、その批判的継承）を試みたものとなっている。

本論は，シンボリック相互作用論のなかでも，その原型としての位置づけをなお依然として

[1)] この状況を憂慮して，これまで我々は，国内外で公刊されてきた種々のシンボリック相互作用論関連の文献の蒐集に力を注いできた（桑原・奥田 2008）。

持ち続ける，ハーバート・ブルーマーの理論化を検討しようとするものである。続く第２節では，その理論化のベースとも言える「３つの基本的前提」について検討し，その後，その「前提」を土台にしたブルーマーの理論化に対する諸批判の整理を試み(第３節)，最後に，そうした諸批判に応えるためにはどのような作業が必要かについて，我々の見解を提示することにしたい(第４節)。

第２節 シンボリック相互作用論の「３つの基本的前提」

ブルーマーによれば，シンボリック相互作用論とは，次の３つの基本的前提を共有する社会科学的パースペクティブのひとつを指す(Blumer 1969=1991)[2)]。

１）人間は，ある事象に対して，その事象が自分にとって持つ意味に基づいて行為する。
２）そうした事象の意味は，人間がその相手（仲間）と執り行う社会的相互作用より，導出され発生する。
３）こうした事象の意味は，その人間が，自分が直面した事象に対処する際に用いる自己相互作用(self-interaction)の過程を通じて，操作されたり修正されたりする。

ここで「自己相互作用」とは，「自分自身との相互作用」(interaction with oneself)とも言われ，それは，「個人が自分自身と相互作用を行っている過程」であり，「個人が自分自身に対して話しかけ，そしてそれに対して反応する，というコミュニケーションのひとつの形態」を意味する。

この「自己相互作用」は，社会学及び心理学において重要な概念として位置づけられている「自我」(self) ないしは「自己」の内実に相当するもの，とブルーマーにおいては考えられている。以下本節では，上記の「シンボリック相互作用論の３つの基本的前提」を手がかりとして，この自己相互作用へと迫ることにしたい。

2-1 「意味」(第１の前提)

第１の前提の要点は，人間がある「事象」(thing)に対して行う行為のやり方ないしその様式は，その事象がその人にとって持つ「意味」(meaning)によって定められている，ということである。

ここで「事象」には，人間が自らの世界において気にとめるであろうあらゆるものが含まれている。木や椅子といった物的な物，母親や店員といった他者たち，友人や敵といった人間に関する各種カテゴリー，学校や政府といった諸々の機関，個人の独立とか誠実さといった指導的理念，命令・要求といった他者たちの活動，その他，日常生活において個人が直面するであろう種々のものごとが含まれている。こうした「事象」が，それに対処する個人に捉えられる(見られる)，その「捉えられ方(見られ方)」，それが「意味」である。

人間がある「事象」に対して行う行為のやり方ないしその様式は，その事象がその人にとっ

[2)] なお本節は，先に筆者の１人(桑原)が公刊したもの(桑原 2002)に加筆補正を施したものである。

て持つ「意味」によって定められる。こうした意味での“「事象」と「意味」のセット”が，シンボリック相互作用論における「対象」(object)を構成することとなる。また，そうした対象がある人間に対して持つ「特性」(nature)とは，その対象がその人間にとって持つ意味によって定められる。

対象の特性（nature of an object）は，それを自らにとっての対象としている人間に対して，その対象が持っている意味から構成されている。意味によって，人が対象を見るやり方，それに対して行為しようとするやり方，それについて話すやり方が定められる[3)]。この「対象」は大別して３つに分けられる。すなわち，(a)物的対象（ブルーマーの挙げる例で言えば，椅子木や自転車など），(b)社会的対象（学生，僧侶，大統領，母親，友人など），(c)抽象的対象（道徳的な原理，哲学学説，もしくは正義，搾取，同情などといった観念）がそれである。

人間を取り巻く「環境」とは，こうした「対象」から“のみ”構成されており，それ故，対象の特性（意味）の如何によって，その環境が人間にとって持つ特性（意味）が定められることとなる。

人間にとっての「世界」(world)とは，この意味での「環境」から“のみ”構成されている。

2-2　意味の社会性（第２の前提）

ブルーマーは，「意味の源泉」に関するふたつの伝統的な立場を次のように説明している。

まず第１の立場においては，事象の意味とは，その事象に内在的に備わっているもの，ないしは「その事象の客観的な構成として，その事象に生来的に備わっている一部分」と捉えられている。したがって，この立場においては，「椅子はそれ自体明らかに椅子であり，牛は牛，雲は雲，反乱は反乱などなど」，それを取り扱う人間の如何に関わらず，その意味は，その事象に生来的ないしは内在的に備わっているものと捉えられることとなる。こうした立場に立つものが，哲学における伝統的な「実在論」（realism）である。

次に第２の立場においては，事象の意味とは，「その事象がその人にとってその意味を持つことになる〔ある特定の〕人間によって，その事象に対して心的な付加物として与えられたもの」と捉えられている。ここで「心的な付加物」（psychical accretion）とは，その人間の心や精神，ないしは心理的な組成を構成する諸要素が，外部へと表出されたものと捉えられている。ここで諸要素には，感覚(sensation)，感情(feeling)，観念(idea)，記憶(memory)，動機(motive)，態度(attitude)などが含まれている。この立場に立つものとして，「古典的心理学」（classical psychology）や「現代の心理学」（contemporary psychology）などが挙げられる。

第３の立場としてブルーマーが挙げるのが，シンボリック相互作用論に他ならない。ブルーマーによれば，事象の意味とは，その事象に生来的に内在するものでも，人間個人によって主観的ないしは心的に付加されるものでもない。それは，まず何よりも，人々の間の社会的相互

[3)] 人間は事象それ自体の如何に基づいてその事象に対して行為するわけではない。あくまでも，その事象が自分にとってどのような意味を持っているのか，換言すれば，その事象に対してその人がどのようなイメージを持っているのか，その如何に基づいて行為（ないしは働きかけ）を行うのである。先に我々が，ある実証研究で明らかにしたように，この「イメージ」(image)は，当該する事象（モノ，人，組織）の評価（その事象に対する働きかけのあり方のひとつ）にとって大きな要因となる（桑原・外 1999)。

作用の過程[4)]から生じるものである。ブルーマーによると，シンボリック相互作用論においては，意味とは，人々の間の相互作用の過程から生じるものと考えられている。すなわち，ある人間にとってのある事象の意味とは，他の人々がその事象との関連においてその人に働きかける，そのやり方から生じてくるものと考えられている。他者の行為がその人にとっての事象を定義するように作用するのである。

この例として「野球のバット」を挙げてみよう。それが，アメリカのティーンエージャーにとって意味しているものと，野球の試合というものを一度も見たことがないアフリカのピグミー族の人にとって意味するものとは当然異なる。また，歌に必要な楽器「モリモ」が，ピグミー族の人々にとって持つ意味と，アメリカ人にとって持つ意味も当然異なり得る。自分が属する文化圏に含まれる他の人々との社会的相互作用を通じて，人は誰でもさまざまな道具を，例えばスポーツのため，あるいは宗教的祭儀のためというように，様々な使い方を通じて楽しむことを学ぶ。野球のバットがピグミー族の人々にとって「謎めいたもの」に見えるように，モリモもまた，モリモが中心的な役割を持つ聖なる祭りを経験したことのないアメリカ人にとっては，「謎めいたもの」に見えるに違いない。バットもモリモも重要な文化的道具であり，両者の意味は社会に暮らす他の人間との相互作用の過程から生まれてくるのである。

ある人間にとっての事象の意味とは，その事象との関連において，その人間と相互作用を行っている他者(たち)が，その人間に対して行為する，その行為のやり方ないしは様式から生じるものと捉えられる。この言明は，先に挙げた３つの「対象」のそれぞれに当てはまる。アメリカ人にとって「バット」という対象(ここでは物的対象)が，まさしく「野球のボールを打つための道具」としての意味を持つのは，そうしたアメリカ人の日々の暮らしの中で，その人と相互作用を行っている他者たちが，その人の面前で(その人に対して)そうした道具として，そのバットを扱ってきたからであり，そのバットという対象に，あらかじめそうした意味が内在化されているわけではない。ピグミー族の人々にとっては，それは「謎めいたもの」としての意味しか持ち得ないことからも，そのことは明らかであろう。

ブルーマーにおいては，事象の意味とは，こうした意味で「社会的所産」(social product)である。たとえば，「言語」という対象は「抽象的対象」に相当する。「言語」という対象の意味は，生来的にその対象に内在化されているものでもなく，また，一個人によって主観的にその対象に付与されたものでもない。ある個人にとっての「言語」という対象の意味もまた，それを，その個人と相互作用を行っている他者たちが，その個人の面前で，“どのように用いるか”によって定められるものと捉えられる(ex.モールス信号の意味)。最後に，社会的対象として，「学校に私服を着てきたある高校生」という例を取り挙げてみよう。彼／彼女は，私服を禁じ制服を着てくることを義務づけている高校においては，明らかに「逸脱者」としての意味を，たとえばその学校に通っている他の生徒たちに対して持つことになる。とはいえ，私服通学を許可している高校においては「逸脱者」とは見なされない。なぜなら，そこでは他者たち(例えばその学校の教員)が，その学校の生徒たちの面前で，「逸脱者」という扱い方を，その高校

[4)] ここで社会的相互作用には，現代的な事情を考慮するならば，対面的相互作用からインターネット空間のコミュニケーションまで，様々な形態が含められるべきである(桑原・外 2002)。

生に対して行っていないからである[5)]。

2-3　意味の解釈（第３の前提）

対象(となる事象の意味)とは，社会的相互作用の文脈において形成され，人々によってそこから引き出されるものである。また人間は，そうして形成された意味に基づいて，その対象(となる事象)に対して行為を行う。換言するならば，そうして形成された対象の意味が，その人間のその対象(より正確にはその対象となる事象)に対する行為の様式を定めることとなる。

ブルーマーが，シンボリック相互作用論の３つの前提のなかでも，とりわけ重視し強調するのが，この第３の前提である。すなわち，他者によってもたらされた，その人間にとっての事象の意味は，その人間によってそのまま自動的に適用されるものではなく，それは必ず[6)]，その人間の「自己相互作用」(self-interaction)を通じて，操作されたり修正されたりするものと捉えられなければならない。

「自己相互作用」とは，先にも述べたように，「自分自身との相互作用」を意味する。それは言うなれば，他者(たち)との社会的相互作用が，個人の内に内在化された，「自分自身との社会的相互作用」に他ならない。ブルーマーによると，この過程にはふたつの別個の段階がある。まず第１に，行為者は，自らがそれに対して行為している事象を，自分自身に「表示」(indication)しなければならない。すなわち，行為者は意味を持つ事象を自分自身に「指し示す」(point out)という営みをまず行わなければならない。第２に，その後行為者は，「解釈」の問題に直面する。「解釈」(interpretation)とは「意味の操作」(handling of meanings)を意味する。行為者は，自分がおかれている状況や自分の行為の方向に照らして，その意味を選択したり，検討したり，保留ないしは未決定にしたり，再分類したり，変容させたりするのである。すなわち，自己相互作用には，「表示」と「解釈」というふたつの段階があるのである。前者の段階において，行為者は，先行する社会的相互作用の過程を通じて形成された「対象」を自分自身に指し示し，後者の段階において，その「対象」(となる事象の意味)を，自らがおかれている状況とそれに対する自らの行為の如何という観点から再検討することになる[7)]。こうした過程を経て確定されたその行為者にとっての「対象」が，その行為者にとっての「自らの行為を方向付け形成するための道具(instrument)」として，その行為者のその後の行為を導いて行くこととなる。

2-4　自我の社会性

自己相互作用とは，個人が自分自身と相互作用を行っている過程である。社会的状況におい

[5)] H.S.ベッカー等の「ラベリング理論」(labeling theory)は，この第２の前提から導出されたものと我々は考えている。

[6)] この「必ず」という点については，大いに議論の余地があろう。我々の考えでは，ブルーマーが1931年に発表した「概念なき科学」(Blumer 1969: 153-170=1991: 200-223)における「知覚」(perception)と「認識」(cognition)に関する説明が，この論点の検討に大きな示唆をもたらしてくれる。

[7)] ここでいう「解釈」なり「自己相互作用」なりは，個人が「我思うゆえに」的な形で自由に(フリーハンドに)行えるものと考えられてはならない。先に筆者の1人(桑原)も明らかにしたように，いつでも「他者の目」を内包する形で行われているものと考えられなければならない(桑原・外 2004 ab)。

ては，その個人は，他者(たち)と社会的相互作用を行っているのと同じように，自分自身とも相互作用を行っている。個人にとっての「世界」(world)が，「対象」(object)から“のみ”構成されているものであるとするならば，個人が社会的相互作用を行っている相手である「他者(たち)」という存在もまた，その個人にとって「対象」(社会的対象)の１つとして存在している，ということになる。であるならば，同様に，個人が自己相互作用を行っている相手である「自分自身」という存在もまた，その個人にとっては「対象」(社会的対象)の１つとして存在していなければならないことになる。すなわち，個人は，自己相互作用を行うに先立って，まず「自分自身」という「対象」を有していなければならないことになる。

ブルーマーによれば，人間は，「自分自身」という「対象」を有することによってのみ，「自己相互作用」を行うことが出来るようになる。人間が自己相互作用を行うためには，それに先だって人間は，まず自分自身(という対象)を有していなければならないのである。

では，そもそも人間が「自分自身」を持つとは，如何なることを意味するのであろうか。ブルーマーによれば，「このことが意味しているのは，人間は自らの行為にとってのひとつの対象となり得る，ということに過ぎない」。では，如何にして人間は，自分自身を自らの行為にとっての「対象」とし得るのであろうか。ある個人にとっての対象とは，その個人と社会的相互作用を行っている他者たちが，その個人の面前で，対象となる事象に対して行う行為のやり方から生じるものとされていた。ブルーマーによれば，ある個人にとっての自分自身という対象もまた，同様の形式で生じるものと捉えられる。そのことについて，ブルーマーは次のように述べている。

> ひとつの対象としての自分自身という考え方は，対象に関するこれまでの議論とも適合する。〔すなわち〕他のあらゆる対象と同様に，ある人間にとっての自分自身という対象もまた，そこにおいて他者たちが，その人間をその人自身に対して定義している社会的相互作用の過程から生じてくるものである。

すなわち，人間は，自己相互作用を行うに先立って，「自分自身」という「対象」を形成しなければならないが，その自分自身という対象は，他の対象と同様に，その人間が社会的相互作用を行っている相手である他者たちが，「その事象〔その人間にとっての「自分自身」，すなわちその人自身〕との関連においてその人に働きかける，そのやり方から生じてくるもの」と考えられる。すなわち，「他者の行為がその人にとっての〔「自分自身」という〕事象を定義するように作用する」と捉えられることになる。

以上，本節における議論を踏まえるならば，「自己相互作用」の内実とは，以下のように説明することが出来る。

すなわち，人間とは，「自我」(self)を有した存在であるが，そこで言う「自我」とは，「自己相互作用」という形式において存在する。そうした意味での「自我」が成立するためには，人間は「自分自身」という「対象」を“前もって”有していなければならないが，そうした「対象」の成立は，その人間が社会的相互作用を行っている相手である「他者(たち)」が自らに対して行っている定義活動を抜きにしてはあり得ない。

「自我（＝自己相互作用)」の“他者・定義・依存性”が，ここに指摘され得る。ブルーマーのシンボリック相互作用論を踏まえるならば，こうした意味で「自我(＝自己相互作用)」とは「社会性」を有した存在である，と言える。

第３節　ブルーマーのシンボリック相互作用論に対する２つの批判

かねてより，ブルーマー（等）のシンボリック相互作用論に対しては，様々な批判が寄せられてきた。シンボリック相互作用論が提示している概念は何れも曖昧なものばかりであり，その内容が前後で首尾一貫していないこともある，とりわけそのキー概念である「解釈過程」（自己相互作用）の内実が十分に解明されていない，解釈過程の「社会による形成と規定の側面」をほとんど閑却してしまっている，シンボリック相互作用論は意識的・知性的なものだけを取り扱い，無意識や感情が人間の社会的相互作用において果たす役割を軽視している，「全体社会の構造的現実を明らかにする努力は何もなされておらず，社会構造についての理論的枠組は存していない」,「ミクロ状況における構造的要因の重要性」に対する視点が欠如している，その方法論の「補充と洗練化」がなされていない,「感受概念〔法〕」の内実が「あいまい」である，経験的な研究過程において「現実を集約し，整理していく」手続きが不明瞭である，彼（等）が推奨する「質的分析」を「職人仕事」的なものから脱却させなければならないという課題がある，などなど（船津 1976: 41-44; 1989: 215)。そうした種々の批判のなかでも常套句的なものとしてこれまで挙げられてきたのが,「主観主義」批判と「ミクロ主義」批判に他ならない（桑原 1997=2009)。

J.D.ルイスによれば，ブルーマー等のシンボリック相互作用論は,「社会のなかでその役割を遂行することはあっても，決して社会の所産（product）にはならない」という人間観（「ジャングルに棲む社会化されざる利己的人間」(an unsocialized calculating man of jungle)）をその根底に持つものであるという。より詳しく述べるならば，ブルーマーにおいて，人間とは，自由に（フリーハンドな形で）解釈を行い，そうした解釈に基づいて行為を構築し，そうした行為が人間の社会を形成するもの，と捉えられている。ところがその一方で，既存の社会（社会構造）から，そうした人間の解釈的営みへと及ぼされるであろう諸影響については，全くといって良いほどその理論化の対象となっていない。このようにルイスは述べている（桑原 2001: 70; 2009: 5)[8]。

上記の主観主義批判をさらに深く展開したものとして位置づけられるのが，徳川（2002）による疑問と回答である。徳川は以下の様に述べている。

> ブルーマーの前提に沿って考えてみよう。ある山が，ある集団にとっては人間がふみいってはならない聖地であり，他の集団にとっては採掘すべき鉱物のありかであると仮定する。また仮に，グローバリゼーションという言葉が，ある集団にとっては互恵的な分業の広がりによって世界が緊密に結びついてゆくことを意味するが，他の集団にとっては特定の力

[8] 詳しくは「社会過程の社会学」(http://ecowww.leh.kagoshima-u.ac.jp/staff/kuwabara/doctor1.htm）の第2節を参照されたい。また桑原(2001)については，桑原(2007a)及び桑原・外(2003)も併せて参照されたい。

の支配力が世界大のものになった結果として地場産業や自文化を破壊されることを意味する〔もの〕としてみる。第1前提のいう通り，それぞれの集団のメンバーはこれらの意味に基づいて行為するであろう。また第2前提の言う通り，その人びとはこうした意味世界の住人であるがゆえにそのような意味を当然視しているのであろう。しかしそうだとすれば，第3前提が言うようにこれらの意味が解釈しなおされることは，そう容易には起こらないことにならないか。その山を聖地と見なすことは当該集団の文化や伝統の中核であろうし，反グローバリゼーションを主張する者は何らかの利害的立場を持つ集団の中で自我形成したと考えられるからである。それが自由に解釈できるのであれば，今度は第2前提が成り立たなくなり，意味は社会との接点を失って，社会学的な説明ができなくなるだろう（徳川 2002: 86-87)。

徳川は，先に本論の前節において展開した「３つの基本的前提」について上記のような疑問を提示し，その前提の捉え返し（疑問に対する回答）を試みている。

またN.スメルサーは，ブルーマーのシンボリック相互作用論のミクロ主義的な性格を指して次のように論難している（Smelser 1988: 122)。

社会学的な分析の中心には，社会構造についての考察をおくべきであり……ブルーマーは，この立場〔＝社会構造を取り扱うという社会学者の立場〕から，社会学者として可能な限りもっとも離れたところに位置した。我々がウェーバーにおいて見出したような，主観的立場（the subjective）から構造的立場（the structure）へと移行する努力は〔ブルーマーには〕全く見受けられない。……如何なる〔社会〕現象も〔それを担う〕個々人の意味の体系という文脈において把握されるべきであるという〔社会学者一般とは〕異なった研究手法を取ろうとするがために，シンボリック相互作用論が有するパースペクティブは，〔主観的立場から構造的立場へと移行する〕すべての可能性を（そして，〔シンボリック相互作用論が〕科学というステータスを得る可能性のすべてを)否定してしまった。

J.H.ターナーも，ブルーマーのミクロ主義的な性格を論難している。ターナーは，ブルーマーが「ミクロな相互作用過程を強調する方法論を採用してきた」と述べ，その分析枠組（パースペクティブ）のみならず，方法論（研究手法）に対しても「ミクロ主義」というレッテルを貼ろうとしている[9)]。

ブルーマーのシンボリック相互作用論に対して寄せられた以上の４つの批判は次のようにまとめることができよう。

1)「社会構造⇒解釈」的視点の欠如（ルイス，徳川）
2)「解釈⇒社会構造」的視点の欠如（スメルサー）
3)「社会構造それ自体」に対する視点の欠如（スメルサー）

9) 前掲「社会過程の社会学」(http://ecowww.leh.kagoshima-u.ac.jp/staff/kuwabara/doctor4.htm）においてその詳細が展開されている。

4)「社会構造」の経験的解明手法の未確立（ターナー）[10]

以下，本論の最終節では，上記の4つの批判に対して，ブルーマーのシンボリック相互作用論からいかなる「反論」ないしは「反論的展開」が可能となるのか，その可能性と方途について考察したい。

第4節　ブルーマーのシンボリック相互作用論の展開可能性

以下，前節で提示された4つの批判に対する我々のスタンスを提示することにしたい。ここで「スタンス」とは，言うまでもなく，ブルーマーのシンボリック相互作用論の「反論的展開」に対する我々の見方を指す。

1）に対して：まずルイスの批判に対しては，既に筆者の1人である桑原が，1996年の段階（桑原 2003: 13-15=http://hdl.handle.net/10232/7917）と2000年の段階（桑原 2009）で既に解決を試みている[11]。したがって，ここで問題となるのは，徳川が指摘する“第3前提の成立可能性”に関する問いである。先に前節で紹介した徳川の疑問に対する彼自身の回答として徳川は，「再読すべきはブルーマーの第3前提ではなく実は第2前提〔である〕」とする視点を提案する（徳川 2002: 89）。行為者による意味付与（＝解釈活動の結果）は恣意的に行われうるものではない。それは複数の人びとの間の社会的相互作用を通じて行われるものである（第2前提）。ではこの命題は第3前提とどのように接合されうるのであろうか。徳川は次のように述べる。「行為者がいかにして特定の意味付与をするに至ったのか。それは分からない。ここにいう行為者とは（したがって解釈なり意味付与の主体は），個人としての個人である場合もあれば，学校長のように組織の代表である場合も，社会運動体のような集合体である場合もある。これらの行為者が満場一致の意味付与を表明するとは考えにくい。となると，誰のどのような意味付与も，他者による異なる意味付与との関係のなかでなされざるをえないことになろう」（徳川 2002: 89）。すなわち，人々の社会的相互作用とは，「異なる意味付与の競合」（徳川 2002: 89）という形で行われるものと捉えられるべきである。「意味付与はそれ自体せめぎ合いであり，ポリティクスなのだ。こう読み直せば，そのとき意味は，異なる文脈の交差のなかで評価や批判にさらされることになるだろう。つまり，第3前提の『解釈』にもつながっていくわけである」（徳川 2002: 89-90）。しかしながらこのように，人々の社会的相互作用を「異なる意味付与の競合」と捉える視点は，ブルーマーには明示されていない，と徳川は述べる（徳川 2002: 90）。そこで彼は，ブルーマーの第2前提のさらなる展開を図る方途として，ビリッグ（Billig, M.）の「レトリカル・アプローチ」を選択した（徳川 2002: 90-101）。とはいえ私見では，わざわざビリッグのような「別の系譜」（徳川 2002: 90）に属する学説を持ち出す必要はない。ブルーマーが1971年に発表した「集合行動としての社会問題」（Blumer 1971=2006）こそ，ここで問題となっているブルーマーの「第2前提」（と「第3前提」との関わり）を理論

---

[11] その後の成果が桑原（2002）であり，その内容に加筆補正したものが，先の本論第2節の内容である。先の第2節で「自我の社会性」が強調されていたのは，この桑原（2002）が，もともとは，このルイスの批判に対する反論を強く意識して書かれたものだからである。

[10] なお，ここに挙げた4つの批判のうち，1）～3）の内容については，既に片桐（1998: 72-73）がJ.F.アレクサンダーの説をもとに指摘している。

化・展開する上で格好の素材であることを，先に我々は指摘しておいた（桑原･山口 2006: 52)。ブルーマーのこの1971年の論文は，その後「社会問題の（社会的）構築主義」の知的源泉となったこともあり，内容的にのみならず，学説的系譜上も，非常に都合が良く，且つ正統な位置づけを有している[12)]。

２）に対して：この課題については，D.R.メインズと T.J.マリオーネが，ブルーマーの遺稿をもとにした *Industrialization as an Agent of Social Change* の編集を通じて回答を試みている(Blumer 1990=1995)。メインズとマリオーネは，まさに前節で挙げたスメルサーの批判を明示的に念頭に置いた上で，この文献の編集と解読を試みている。訳者の片桐雅隆によれば「この本は，……従来『ミクロ社会学』と位置づけられてきたシンボリック相互作用論が産業化という『マクロ現象』を扱ったものとしても注目される書である」(Blumer 1990=1995: 239)。

３）に対して：社会学の鉄則に「行為するのは個人，されどそれを可能にするのは社会〔構造〕」（桑原 2007b）というものがあるが，これはまさしく「ミクロ－マクロ問題」が提起した問題の１つである。この批判に十全に応えることは，そのまま「２)」の批判に対する回答を提示することにもつながる。この批判に応えるに際しては，内田（1996）も強調するように，ブルーマーの「ジョイント・アクション」(joint action）論を展開する作業が必要となる。内田も述べるように，ジョイント・アクション論には明確に構造論的視野が提示されている。このジョイント・アクション論を精緻化することで，ブルーマーに対して寄せられてきた「非構造論的偏向」なる批判に対して１つのリプライを返すことが可能であるが，先に別稿において我々が明示したように，ブルーマーの社会観が初期シカゴ学派社会学より継承した[13)]「均衡論的変動論」（吉原・桑原 2004: 105, 117）に立脚している以上，ブルーマーにおける「構造」とは「過程のただ中にある構造」(内田 1996: 108-109)として概念化されなければならない点をここで強調しておきたい[14)]。

４）に対して：この問題に対してかつて船津　衛は次のように述べていた。すなわち，「……シンボリック相互作用論はミクロ社会学の性格を帯びたものであり，したがって，小状況の研究に徹する方がその特質を生かすことになる，という見解が……有力化しつつある。この見解はシンボリック相互作用論内部においても強まってきている……」(船津 1989: 233)，と。そしてこの問題こそ，目下，ブルーマーのシンボリック相互作用論が抱えている最大の問題でもある。ブルーマーのシンボリック相互作用論は，その研究手法の鉄則として「行為者の観点」(standpoint of the actor）からのアプローチを推奨している。ごく簡単に述べるならば，研究者が１つの社会を研究する際には，その社会を構成しているあらゆる人々の「観点」(standpoint/

---

12) 西澤・外（2008: 35, 61）及び Blumer（1971=2006: 51-55）を参照のこと。なお，以上の考察を踏まえるならば，この徳川の批判は，より正確には，「1)」に位置づけられるもの，というよりも，「1)」と「2)」の狭間に位置づけられるもの，と捉えることができよう。

13) ブルーマーと初期シカゴ学派社会学との連続性については中野・宝月（2003=2009: 281-290）を参照されたい。

14) なお，内田も強調するように，ジョイント・アクション論には，「垂直の関係」と「水平の関係」が提示されている。前者の考え方を継承するものとして，A.L.ストラウス等の「覚識文脈」論と「交渉的秩序」論が挙げられる。また後者の考え方を継承するものとして「社会的世界」論が挙げられる。前者については山口（2008）が，その詳細な検討を「社会的世界」論との関わりにおいて試みている。また後者については桑原・奥田（2009）が，T.シブタニの論文「パースペクティブとしての準拠集団」(1955）の展開版にあたる「準拠集団と社会統制」(1962）をもとに，その詳細な検討を試みている。

perspective）を取得し，そこで得られたデータから社会の構成を跡づけなければならないとするものである（中野・宝月 2003=2009: 288-290）。もしこの「鉄則」を堅持した上で，研究対象とする社会の規模を「マクロ化」して行くならば，研究者の技量にも因るが，ミクロ・レベル（２者・３者）からメゾ・レベルへ，そしてマクロ・レベル（N 者）へと至るいずれかの地点で，「集団全体の役割を取得すること」という営みが不可能なものとなってしまう（桑原 2001: 76; 2003: 15; 2009: 10-11）。この問題については，先に挙げた内田（1996）にも，またメインズ等の試みにも，その回答はおろか足がかりすら提示されていない。

以上，ブルーマーのシンボリック相互作用論に対して寄せられてきた諸批判のうち，重要と思われる２つの批判（主観主義批判，ミクロ主義批判）に焦点を当て，その内実を４つのサブ・カテゴリーに分類し，それぞれに対するブルーマーの理論化をもとにした「反論的展開」の可能性について考察してきた。今後，我々（桑原・木原）は，この４つの課題（批判）のそれぞれに取り組んで行く予定である。

引用・言及文献

Blumer, H.G., 1969, *Symbolic Interactionism*, Prentice-Hall=1991 後藤将之訳『シンボリック相互作用論』勁草書房.

———，1971, Social Problems as Collective Behavior, *Social Problems*, vol.18=2006 桑原　司・山口健一訳「集合行動としての社会問題」『経済学論集』66鹿児島大学経済学会（http://hdl.handle.net/10232/6922）.

———，1990, *Industrialization as an Agent of Social Change*, Aldine=1995 片桐雅隆・外訳『産業化論再考』勁草書房.

Charon, J.M., 1989, *Symbolic Interactionism: 3rd(ed.)*, Prentice-Hall.

船津　衛 1976『シンボリック相互作用論』恒星社厚生閣。

——— 1989『ミード自我論の研究』恒星社厚生閣。

宝月　誠 2008『シカゴ学派の逸脱研究の再検討』平成17～19年度・科学研究費補助金・研究成果報告書。

片桐雅隆 1998「シンボリック相互行為論をめぐる２つの争点」『社会学史研究』20日本社会学史学会。

桑原　司 1997=2009「ハーバート・ブルーマーのシンボリック相互作用論における社会観再考」『鹿児島大学リポジトリ』（http://hdl.handle.net/10232/6937）。

——— 1999=2007「社会過程の社会学（博士学位論文の要旨及び審査結果の要旨）」『TOUR（TOhoku University Repository）』（http://hdl.handle.net/10097/14389）。

——— 2001 Introduction to a sociological perspective of Symbolic Interactionism（3）（The Summary of a doctoral dissertation, Tohoku University）『KEIZAIGAKU-RONSHU˜ OF KAGOSHIMA UNIVERSITY』No.54（http://ci.nii.ac.jp/vol_issue/nels/AN00070433/ISS0000339291_ja.html）。

——— 2002「自我の社会性」船津　衛・安藤清志編『自我・自己の社会心理学』北樹出版（http://space.geocities.jp/isssn03890104no54/kuwabara2002a.htm）。

——— 2003「『シンボリック相互作用論ノート』の web 公開について」『鹿児島大学総合情報処理センター「広報」』16（http://w3.cc.kagoshima-u.ac.jp/information/index05-1-1.html）。

——— 2007a「The Errata of “Introduction to a sociological perspective of Symbolic Interactionism（3）（The Summary of a doctoral dissertation, Tohoku University）” *KEIZAIGAKU-RONSHU˜ OF KAGOSHIMA UNIVERSITY*（No.54）et al.」『Discussion Papers In Economics and Sociology』No.0701（http://cid-d0d96430883d7824.profile.live.com/）。

——— 2007b「『埋文報告偽造』記事に異議あり！問題は文化財行政のあり方ではないのか？」『市民・メディア』128人権と報道関西の会（http://hdl.handle.net/10232/8478）。

――― 2009「No.0501, 0601, 0701合冊版」『Discussion Papers In Economics and Sociology』No.0902 (http://hdl.handle.net/10232/8157)。
――― ・外1999『地方中枢広域都市における防災コミュニティの形成過程に関する研究』財団法人第一住宅建設協会 (http://hdl.handle.net/10232/8477)。
――― ・外2002「編集後記」『鹿児島大学総合情報処理センター「広報」』15 (http://hdl.handle.net/10232/8138)。
――― ・外2003「編集後記」『鹿児島大学総合情報処理センター「広報」』16 (http://hdl.handle.net/10232/6939)。
――― ・外2004a「住民の環境共生行動の形成と循環型社会の構築」鈴木基之編『循環型社会システムの屋久島モデルの構築(第3の1分冊)』平成13年～15年度・文部科学省科学技術振興調整費・先導的研究等の推進研究報告書。
――― ・外2004b「住民の環境共生行動の形成と循環型社会の構築」井上佳朗編『科学技術振興調整費・先導的研究等の推進・「循環型社会システムの屋久島モデルの構築」プロジェクト・人文社会グループ研究報告書』鹿児島大学屋久島ゼロエミッションプロジェクト法文学部事務局。
――― ・奥田真悟2008「シンボリック相互作用論文献リスト(上)」『経済学論集』69鹿児島大学経済学会 (http://hdl.handle.net/10232/8117)。
――― ・奥田真悟2009「T.シブタニの準拠集団論の可能性(2006年度シカゴ社会学研究会報告資料)」『Discussion Papers In Economics and Sociology』No.0901 (http://hdl.handle.net/10232/8097)。
――― ・吉原直樹2004「都市社会学の原型」宝月　誠・吉原直樹編『初期シカゴ学派の世界』恒星社厚生閣 (http://space.geocities.jp/isssn03890104no54/kuwabara-et-al2004.htm)。
中野正大・宝月　誠編2003=2009『シカゴ学派の社会学』世界思想社。
西澤晃彦・外2008『社会学をつかむ』有斐閣。
Smelser, N.(ed.), 1988, *Handbook of Sociology*, Sage.
徳川直人2002「相互行為とイデオロギー」伊藤　勇・徳川直人編『相互行為の社会心理学』北樹出版。
内田　健1996「ミクロ－マクロ問題 ― 相互行為論からのアプローチ ― 」『人間科学研究』9(1) 早稲田大学人間科学部。
山口健一2008「『文化』表象と『混交』のコミュニケーション論」2007年度・東北大学大学院情報科学研究科・博士学位論文。